

2016年2月28日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 18章 1～8節

説教：私に免じて

あらすじ

今日の箇所に入る前に、これまでのあらすじをふり返ります。

ダビデの息子アブシャロムは、自分こそイスラエルの王であると名乗りを上げ、宮殿のあるエルサレムに入城しました。父ダビデは大急ぎでエルサレムを脱出し、いろいろな人々の手に支えられながら荒野に逃げ延びます。混乱の中、多くの家来たちがダビデを見捨てて敵の側に寝返っていきました。そのいっぽうで、ダビデと最後まで行動を共にしたいと思う者もいました。そのようにしてダビデに従った者は、およそ数千人から数万人と思われる。

昨日まで立派な宮殿で暮らしていたダビデでしたが、一夜明けてみると、今のことばで言えば難民となってしまいます。食料がある訳ではありません。ゆっくりと休める家がある訳ではありません。どうするかと悩んでいたときのことで。その地方に住んでいたバルジライという人が、難民キャンプに多くの食料と生活道具を運んできました。困っている人たちがいるから人道支援をしましょうという話ではありません。ダビデは今や指名手配されている身です。ダビデをかくまう者は容赦なく殺される可能性があります。それでも、ダビデの中に神が生きておられ、その真理があることを知ったバルジライは、いのちをかけてダビデを支えていきます。

1 ダビデ

1) 三人の将軍

ダビデはこれで一息つくことができました。しかしゆっくりとはしてられません。アブシャロムの軍隊がダビデを殺すためにエルサレムを出発し、こちらに向かっているとの情報が伝えられました。

今までアブシャロムと真正面から戦うことがないようにと努力してきたのですが、もうこうなると避けることができません。ただちに戦いの準備に入ります。民全体を大きく三つに分け、それぞれをヨアブ、アビシャイ、イタイの三人にゆだねて指揮を執らせます。この三人は何者であるのか。すこし触れておきます。

一人目のヨアブについてはこのあと詳しく触れますので、彼を飛ばして二人目のアビシャイから。彼はヨアブの兄弟で、若いときからダビデといっしょに率先して敵と戦い、ダビデを支えてきた人です。

三人目のイタイ。この人は、実はイスラエル人ではなくてガテ人とあるように外国人です。彼は、自分の国に住んでいたときおそらく政治的な理由によって迫害を受け、今ふうに言えばイスラエルに亡命して来た人です。若いときからの知り合いであるダビデを頼って逃げてきました。ダビデも喜んで彼を迎え入れます。その直後に、この騒動が起きてしまい、ダビデも亡命者になってしまいます。ダビデはイタイをこの騒動に巻き込むのを心苦しく感じ、エルサレムから脱出するときに、「あなたはここにとどまっていいていいですから」と勧めます。ところがイタイは、「生きるにしても死ぬにしても、私は王のそ

ばで仕えます」と言い、ダビデと行動をともにしていきます。そういう人でした。

## 2) 私もいっしょに戦いに出たい

ダビデはこれらの軍隊を送り出すとき、「私自身もあなたがたといっしょに出たい」と申し出ます。しかし部下たちは、「いやいや、王さまは町にとどまっています」と止めにはいります。確かにダビデが若かったときは、いつも戦いに出ていましたから、いっしょに出たいという気持ちはわからないでもない。でもダビデはイスラエルの最高司令官です。部下が言うように、戦場でもしものことがあったら大変なことになります。自分は安全なところにとどまり、戦いのことは、三人の将軍に委ねておく。それが戦いの原則です。民たちが戦場で戦っているとき、ダビデも苦勞をともにしたい、ということだったのかもしれませんが。でもそれだけでしょうか。他にも理由がありそうです。二つ考えられます。

## 3) ダビデの罪の始まり

一つ目。それはダビデがまだ若かったときのことと関係します。今、王は戦いにいっしょに出たいと言っていますが、いつもそうだったのか。実は一度だけ彼が戦場に出なかったときがありました。第二サムエル記 11 章 1 節。「年が改まり、王たちが出陣する頃、ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエルの全軍とを戦いに出した。彼らはアモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまった。」

エルサレムにとどまりゆっくり休んでいたダビデは、バテ・シェバと姦淫の罪を犯します。このことがきっかけとなってダビデー

族に大きな罪が入り込んでしまいます。息子たちが性的な罪を犯しても、ダビデは父として正しく導けなくなってしまいました。いまアブシャロムが父を殺そうとしています。その動機をたどっていけばダビデの罪にたどり着くと言ってよい。決してアブシャロム一人だけが悪いわけではありません。ダビデはそのことに気がついていました。

あのとき、自分は戦場に出るべきであった。戦いに出なかったことで、自分は罪を犯してしまった。そのことをずっと後悔してきました。だから今言うのです。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」あのときの罪がダビデの中でうずいています。これが、ダビデが戦場にいっしょに行きたいと語った一つ目の理由です。

## 2 私に免じて

### 1) ヨアブとアブシャロムの葛藤

では二つ目の理由はなにか。そのことを説明する前に、先ほど三人の将軍の中のうちで一人だけ飛ばしておいたヨアブのことに触れておく必要があります。特にヨアブとアブシャロムの関係についてです。

時間は少しさかのぼります。アブシャロムは、兄のアムノンを憎み、あるとき殺してしまうのですが、そのため父ダビデをおそれて母親の実家に逃げ込み、そこで三年間かくまわれていました。当然、王子としての権利は剥奪されてしまいます。

ヨアブは、そのことをそばで見ている心配します。こままではいけない。父親と息子の関係を修復させなければと考え、いろいろな智恵を働かせてなんとかアブシャロムがエルサレムに戻れるように、ダビデにとりなします。その結果アブシャロムは自宅に戻るこ

とができた。そこまではよかった。問題はこれからです。

ダビデは自宅に戻ってきたアブシャロムに会おうとしないのです。アブシャロムは、このことを苦々しく思い、ヨアブのところを使いを出し父に会うための仲介の労を執ってもらおうよう働きかけます。ところがヨアブは、その頃からアブシャロムに距離を持っていたのでしょう。要求を無視します。業を煮やしたアブシャロムは、強引な手段に出ます。アブシャロムが、ヨアブの畑に、それも収穫前の畑ですが、そこに火をつけたのです。あわててヨアブは、王と息子が会えるように段取りをするのですが、ヨアブの気持ちはたまりません。非常に腹を立てました。けれどもアブシャロムは王子です。ヨアブは手出しができません。ヨアブの腹の虫が治まらない。アブシャロムを憎み続けていたのです。そのことがこの箇所背景にあります。

## 2) アブシャロムを助けたい

話を 18 章に戻します。いま勢いはアブシャロムにあります。けれども、彼には実戦の経験がほとんどないという弱点があります。いっぽう、ダビデ軍の指揮を執る三人の将軍はいずれも軍人として優れた経験と能力を持っています。経験から言えばダビデの側にも十分に勝つ可能性が残されています。勝つということは、ダビデが生き残り、アブシャロムが死ぬことを意味します。二人が生き延びると言うことはありえない。それが常識でした。

ところがダビデはまったく別の道を提案します。5 節を読みます。「王やヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱って

くれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。」

たとえアブシャロムを捕まえたとしても殺さないで欲しい。多くの民たちが聞いている前で、ダビデは三人の将軍に命じています。

この命令をヨアブがどのように聞いたか、ここには何も書かれていません。しかしこのあとすぐにわかりますが、ヨアブは複雑な思いで聞いています。ヨアブはアブシャロムに対して、強く憎しみを抱いていました。これを機会にアブシャロムを殺そうと考えていました。ダビデはそのことに気がついていました。だからなんとかそうならないようにと、ヨアブを監視するためにいっしょに戦いに出ようと言いだしたのです。これが二つ目の理由です。

こんなひどいことをするアブシャロムは殺されるべきだ。誰もが思っています。しかしダビデは違います。なんとかアブシャロムを救いたいと考えます。もちろん、道理が立つ話ではありません。無理なことは十分わかった上での話です。だからこう言うしかありません。「私に免じて。」それ以外に納得させる理由がありません。道理が立たなくても、無理を通してでも救いたい。イスラエルの王は、将軍たち、民たちの不満にたえながら、なお息子の命のことを思って、頭を下げていきます。

## 3 イエス・キリスト

いつものことですが、ダビデの姿を通して、主イエス・キリストが浮かび上がってきます。父を殺そうとする息子。ひどい話だとだれもが思うでしょう。でも、私たちは何をしてきたのでしょうか。私たちを造ってくださった方

をこの手で殺そうとしてきたのではないか。神などいないと言い張り、自分こそこの世の神であるかのように振る舞い、ひたすらこの世の王の座を目指して、弱い者をたたき落としてきた。アブシャロムはひどい息子だと言うのなら、私達もひどい息子です。

そんな私達を神はどうご覧になっているのか。殺すべきであると考えたか。いいえ。

「わたしに免じて、この者たちをゆるやかに扱っていただきたい。」主は、頭を下げて父なる神にお願いをし、私達に代わって父の怒りのさばきをお受けになりました。どんなに背いても、どんなにひどいことをしても、この方は、「あなたはわたしの子どもである」と言ってくださいます。私達がどんなにひどいことをしても、この方は「わたしに免じて、この子どもたちを赦してください」と、頭を下げながら、へりくだりながら、私達のことをどこまでも救い出そうとされます。

主の恵みを覚えたいと思います。